

ふるさとの和泉の山をきはやかに

浮けし海より朝風ぞ吹く

歌 意

和泉の山々のなだらかな稜線が朝の澄み渡った空にくっきりと見えています。海から吹いてくる今朝の風は、なんと心地よいことでしょう。

掲出歌集 『火の鳥』大正8（1919）年8月  
初出 「大阪毎日新聞」大正6年6月18日、題は  
「山雨餘滴」（晶子39歳）

